

## かくして与市 故郷を捨てにけり

福 明 子

序

与市は二羽の鶏の喉を片手に一羽ずついっぺんに驚づかみにすると、馬乗りになって首を捻り、その上で激しく二三度桜の幹に叩き付けた。与市に慣れた鶏であったから事は造作なかった。そこまでを息を止めて一気に成し遂げると、あとは鶏をぶら下げてふらりと歩き出した。「あんちゃん！」と源太の声がすがりついてきたが、与市はただ前だけをを見て歩き続けた。鶏の目が気になって手にぶるぶると震えがくると、逆らうように唇を尖らして、かすれて音にならない口笛を吹いた。確かに、夜更けに出る汽車に乗るには、手早く汽車賃が変わる品物が何か必要だった。十五歳の与市が、生まれて初めて乗る夜汽車である。汽車は波を被つてしばらく海の縁を行くはずだった。

「海ん中走るんや」

与市はそう言つて目を閉じた。一度閉じると閉じたままで、ずっと夜道を死なせた鶏と歩いた。

一、海を見た春

その海というものを、与市は五歳になるまで見たことがなかった。だが、生まれ育つた町の風は、やはり驚くほどの潮気を含んでいたし、朝夕に手籠を下げて売りに来る捕れたての小海老や小魚には、日本海がピチピチと跳ねていた。

与市の父文吾は菓子職人である。その昔はお城へお出入りを許されていたという由緒ある『福村』の暖簾を二十五歳で引き継いだ。無論、文吾もそれから脇目も振らず和菓子に明け暮れており、海に船を漕いで暮らしを立てることなど到底ありえない。だが与市が幼い頃、この

父が出先から帰る度に福村の家の中には潮の香りが吹き込んだ。実はこれは、文吾が回船を使って大阪の商人たちとの商売に手を広げただけで、船が着くと文吾は毎日のように港に出て行った。港から帰った父は威勢がよく、まるで海の男のようにてかてかと脂ぎって光っていた。

「父ちゃん、漁師になつたんか？」

父

に向かつてそう問い掛けると、父は白い歯を見せて、

「与市は、海が好きか」

と聞き返してきた。

「ああ、好きや」

見たこともない海だが、与市は間髪を入れずそう答えた。

「いつかおれも父ちゃんみたいな漁師になつたる」

この時の父がいつになく上機嫌だったのを、与市は三つ子の記憶として覚えている。

そもそも、町は古くから海を回って大阪と繋りを持ってきた。近在とは微妙に違う大阪弁に似た土地言葉が関わり合いの深さを物語っている。だから、こういう商売は決して奇抜な発想ではなかったのだが、さて、職人氣質の父が手を染めた商売が、福村の名と菓子味とをどのくらい食い道楽の大阪人に知らしめたものか、そのところは与市には後になつて慮ることも容易ではない。ただ物心付いた時分には、長兄が小学校を終えてすでに菓子作りに手を染め始めていて、けして贅沢な暮らしではなかったが、伸び盛りのような活気が、この家族にはあった。家族とは、父と母と、他に兄が二人。先代に当る祖父と祖母。この総勢七人の所帯である。

ところが平和なこの所帯にとんだ荒波がかかった。与市四歳の夏のことである。海の縁を突然に襲った大地震で、福村の蔵は三つのうち二つが文字通り潰れた。次いで災いの後の傷が人を追い詰め、手のかかった菓子の美しさに金を出す人が一気に減り、残りの蔵一つさえも揺らぎ始めた。文吾はこの傾き始めた屋台骨を、大阪での商いに頼って立て直そうと図ったが、こうなると上手くいくはずのものも躓くのが商いの常というものである。ただ、文吾にも家長の意地も面子もあつたから、船が傾いても櫓は放せず、また周りにも文吾のする事に逆

らうほどの見通しがなかった。畢竟、福村は見る間に嵐に揉まれる小船のような有様となつて、家の中に金の無い事だけは、幼い与市にも察しがついた。こうして迎えた五歳の春、与市は、新しい運命と出会うことになる。

与市の母は名をちさという。ちさは、隣村の漁村に生まれた女で、女親は早くに亡くし、男親も海で死んで、福村にはそもそも奉公で入った。その自分の分を嫌というほど弁えて常日頃はただただ物静かな働き者であつたが、その日、珍しく大声で姑の前に立ちはだかつている。

「うちが話します。与市は、この腹から出てきた子です。どうぞ、与市には、うちの口から話を……」

義母を拜むようにしてそのまま、母は与市を連れて店を出た。そして、与市の手を引いて小半日、日の傾くまで歩き続けた。小学校の鉄棒にぶら下がり、福村の人間は食べてはならぬと聞かされ続けてきた飛行船型の下卑た焼き菓子を、その日ばかりは袋にいっぱい買つてもらい、満開の桜に縁取られた小川を辿り、その間中、母はまったく口を開かなかつた。親の気持ち常とは違つたのを、子というものはどこかで察するものである。どうして母が物言わぬのか、尋ねてはいけないと与市は思った。尋ねれば、きっと何か悪い事が降りかかるに違いない。だが五歳の子には、分かつていても母の沈黙の方が怖くて我慢がならず、飛行船の菓子が胸苦しいほど甘くてやりきれない。とうとう力尽きたようにうなだれて、

「母ちゃん」

と小声で言つたたちょうどその時、潮騒が地鳴りのように足から這い上がった。びっくりして顔を跳ね上げると、暮れる間際の一面の藍色が目飛び込んできた。海である。辿つてきた小川は混ざる流れもなく細いままで不意に折れて小さな滝になり、シヤラシヤラと頼りなげな音を立てて崖を落ち、海に入り込んでいる。

「母ちゃん、地面ておかしなもんやな。こんな急に切れたようにのうなつてしまふんやな。それで、これが、これが海つちゆうもんか」

しかし母は与市の言うことには答えず、

「なあ与市」

と膝を折った。

「母ちゃんにはこの世にもう親と名の付くもんはおらん。けどたった一人、血を分けた姉さんがおる。ほれ、あれが姉さんの家や。崖の上に海と喧嘩するように建ってるやろ。実はな、その姉さんに子が出来ず、淋しい思いをしてはるんや」

「…母ちゃん？」

「なあ与市、母ちゃんが頼むさかい、お前、今日から姉さんとこの子になってやってくれんか」

「…」

海は、打ち付ける風に総毛立っていた。

「姉さんとこの子になれば、お前が総領や。兵隊さんにかて、ならんですむ」

「兵隊さんは、おれ、好きやもん」

あほなこと言うたらいかんと母は子にきつい顔を見せた。

「母ちゃんが一番大事なのは、与市の命や。どこにいても与市が元気で生きてくれたらそれでええ。戦なんてむつかしい事、せんでええんや」

叱られて、言いたい事はまだ他にあつたのが、頭の中が熱くなって言葉が組み立てられなくなった。這い松が足元をうねり、与市の膝を松葉がつついた。

## 二、漁師の子

五歳まで見たことのない海を、与市はこの日を境に毎日眺めて暮らす事になった。与市の貰われた先は、母の生まれ故郷でもある隣村で、福村の店から二里足らずのところになり、与市は取り敢えず故郷に踏みとどまったことになる。時を同じくして東京へ養子に出された下の兄に比べると、ずっと母に近い。だがそこは驚くほどにそれまでとは暮らしの質の違ういわゆる半農半漁の村で、菓子屋などと言う

ものには端から誰も関心がなく、したがって福村の名を知る者のいない土地であることに変わりはなかった。

新しい父の源蔵は独り北から流れてきたという変わり種の漁師である。遠海に出る大きな船に乗れば半年帰らないこともある。育ての母となるちさの姉はきみという名の痩せて小作りな女で、笑うと余計に淋しさの増す顔をしていた。なにせその顔を見て五歳の与市が思わず、「今日から、おれがある。淋しがらんでええ」と、そう言ったのである。ちさはその与市の言葉を聞いて安堵の胸を撫で下ろし、姉と顔を見合わせて笑ったが、与市に隠したその笑顔は、実はきみの笑顔とそっくりだった。ちさはこの時、与市に新しい親を「お袋さん」「親父さん」と呼ぶように教え、与市は、

「そんなら母ちゃんは母ちゃん、お袋さんはお袋さんやな」と安心したように言って漁師の子になった。逆らう事を知らなかったわけではないが、逆らい切れない大きなものが世の中にあるのを、五歳の春、与市は不思議に分かってしまっていた。

育つ子は親が守るもの。子が親に守られるものと世間がそう決めるならば、おかしな親子がここに出来上がった。もしもこの養母にもう少し芯が在ったなら、逆に自分は捻くれておつたらうと、与市は振り返って思う。父親の影の薄いこの家で、与市は柱にも土台にも屋根にもなつてよく働いた。「お前を学校に行かしてやらな、ちさに顔向けが出来ん」と養母は口癖のように言ったが、実際はそれどころではなかった。源蔵は金に無頓着な男で、たまに陸へ上がったも、半年分の稼ぎを一晩で飲み干してしまつたり、揚げ句は借金まで作つて海に帰つてしまう。そしてその度に養母に頼られるのが、これがなんと与市の励みであった。

「海は重宝なもんやな、お袋さん。けどおれは海になんぞ逃げ出さなぞ」

漁師の子はこう言つて、あれほど好きだったはずの海に背を向け、新しい母に寄り添つた。源蔵は与市に辛く当たるわけではなかったが、ただたまに帰ってきてても他人の顔で、与市を抱くことも頭を撫でることも無かった。「親父さん」の体温を知らぬ与市には、養父など初め

からいらないと思ひ込むのは容易なことだったのである。

与市が家に入つて五年、崖つぷちあつて海に倒れ込みそうだった源蔵の苦家の回りには、いつの間にかどこよりも勢いのある作物が実り、家も心なしかしつかり建つて見えた。そしてそれといつしよに与市にも、わずか十歳とは思えぬりつぱな男の面構えが出来上がった。

この十歳の冬、怒濤の海に風花の飛ぶ日に、与市に弟が出来た。きみが源蔵に嫁入つて十年目、もともとが他所者だった男の空っぽの苦家に親無し娘がふわりと住み着いたように言われ続けて、子を産まねば女房にもなれぬような理不尽が村にはあつた。十年目の子はきみの執念と意地が形になつたのかもしれない。

さて、与市である。養母の枕辺を追い出され、弟の産声を雨戸の外で聞くと、そのまま浜へ出て嵐の海を被つている。自分の心を底の底まで抉り出して、波でざぶざぶ洗つてしまいたい。もしもそれが出来たなら、余計なことは考えず、弟の誕生を素直に喜ぶことも出来たろうに。どうしても笑顔になれぬ自分を、大嫌いだと与市は思った。ただもうこれから先はおれがおらんでもあの人は…お袋さんは淋しがつたりせんのかなと思うと、五歳のときから忘れ去つていた自分自身の淋しさが途端に吹き出して止まらない。どうしようもない。海に叫んで何か吐き出そうとすると、「親父の…源蔵のせいや」と言葉が勝手に飛び出してきて、自分でもその言葉の意味が分からない。ただ、一度首を持ち上げてしまった淋しさは、もう二度と押し込めることができない。だからこの日から、与市は淋しさを抱いたそのまま海に向き合う事を覚えた。歳月をやり過ぎす術である。大抵の人間が年老いてから学ぶこの術を十歳で身に付けてしまえば、この後の与市の長い一生に怖いものは無いはずだった。

### 三、鶏

寄せる波は必ず返してさらに四年の後、つまり与市が養子に出てから九年の歳月が過ぎたある日、

「与市、与市やないか」

暮れかけた福村の中庭で、降るような力ナカナと一緒にちさが声を上げた。九年の間、遠目に見るだけだった我が子は十四歳。褐色の肌を持つ若者になつて目の前の晩夏の中にひよつこり立っていた。ただ、その焼けた肌には当然あつていいはずの若い生気はまるで無く、与市はただただ疲れ果てて、霞むような目をして体全部で泣いているのである。

「何しに戻つた。いつからそこにおる。与市、与市？　しつかりせえや」

「母ちゃん…あの人、死んでまう」

「あの人？」

「おれのお袋や」

「え？　姉さんが？」

「おれのせいじゃ。どないしょ。なあ母ちゃん、どないしょ」

と与市は崩れ落ちた。きみは半年前から床を離れられなくなつていた。無論、与市が何をしたからというわけではない。ただ、きみの病が子を宿す下腹に生じた病だと聞いたときに、与市は空恐ろしさに立つていられなかつた。もう子など産んでほしくないと心ひそかに願っていたのは、まさかこんな成り行きを思つてのことではない。だが、自分の身勝手な思いが養母の下腹に五寸釘でも刺したような気がした。数えで五つになる弟の源太が母に近寄る事もせず、自分の尻に張り付いてくるのがたまらなかつた。

「そうか…姉さんが死なはんのか。で？」

「は…」

「与市、お前はそんな時ここへ何しに戻つたんや」

「何しにて、母ちゃん…母ちゃんの姉さんやろ」

「ああ、そうや。だが母ちゃんは会いにはゆかん」

「なんでや」

「与市を姉さんにやつたとき、姉さんとは十年、縁を切つた」

「…」

「姉さんから、頼まはつたことや。互いに行き来せんで、十年堪えて

ほしい。腹を痛めん女が与市の親になるためや言うて、手をつかはつた」

「……」

「いま行つたら、ましてお前に連れられて行つたりしたら、会わずにおつた九年間まで台無しにする」

「……おれがいるからか。おれがいるから会われんてことやな」

「心配ないやろ……うちが行かんでも、姉さんには頼る子がある」

与市の体からすつと、涙がどこかに引き揚げていった。代わりに、怒りでも悲しみでもない何かが、苦しいほど胸の中で渦を巻いた。与市にはただ、母の理屈のおつた強さが驚きで、ははあ、女とはこんな風に生きられるものかと、それこそ他人を見るように九年ぶりの母を見た。自分の知らぬうちに、二人の母が交わしたという約束は、理屈で歯向かう術を知らない与市の、鼻の奥につーんと染みだした。いつでも会えると思うから、会わずに堪えて来られたものを……。

「そうか。そんなら母ちゃんとおれも会つてはならんと決められとんのかな。よう分かつたわ」

と言葉尻は吐き捨てるようになって、急に体に力が戻り、母に背を向けて駆け出そうとするのを、

「待て、与市」

と一旦呼び止めておいて、ちさは蔵の影に消えた。戻つたちさの腕の中には、なんと鶏が二羽。ちさはその場で一羽を背負い籠の中に入れて自分の被っていた手ぬぐいで覆いをし、与市に背負わせた。それからもう一羽を与市に抱かせようとして、ここで初めて母と子は手と手を触れ合つた。刹那、与市は再び驚きで目を丸くする。母の手はまるで悴んだように冷たく、そしてかわいそうなほど震えていた。目とも唇とも裏腹の、ただただか弱い母の正体が、震えの止まらぬ手だけに集まっていた。

与市は夜道になつた二里の帰り道を鶏を抱いて駆けた。鶏が騒いだ時にだけ足を止めて、手にある一羽を抱き締めて、「堪えてなあ」と頬ずりした。一羽が静まると、不思議と背中の一羽も静かになつた。

さて、肩で息をしながら帰り着き、寢床の中の養母にどこへ行つて



きたと聞かれた時に、与市はこの鶏を養母の前へ突き出して、「珍しく親父さんが金送ってきたんでな、見てみ、鶏買ってきたんじゃ」と嘘をついた。嘘は自分でも上手くつけたと思った。与市の心の中で、二人の母は背中合わせに泣いていた。鶏はさっそく捻って焼いてやると言うと、

「殺す気か？」

と、きみは驚いたように聞いた。それで結局この鶏は、海の朝焼けとともに時を告げながら、きみのために卵を産む羽目になった。

与市の看病もまた、夜明けと共に始まった。日が高くなれば、薬代のための小銭稼ぎに雑役に出るのが日課となったからである。養母の体は半年の闘病で生気を失い、枯れ枝のように瘦細っていたが、下腹は別の生き物のように膨れて突き出ている。その下腹を擦ってやると、膿のようなものが止めどなく股の間から流れ出た。異様な臭気が立ち込めた。それは生きながら、腐り始めた人間の死臭のようでもあった。「お袋さん、よう聞けや。これは親子ですることや。恥ずかしいなんてこと、言うたら許さへんぞ」

与市の言葉に歯を食いしばって、養母は黙って下の世話をこの息子に委ねた。一時ほど辛抱強く腹を擦ってもらった後は、それでもずいぶんと楽になるらしく、きみは決まって寝息をたて始める。与市はそれを見て取ると、汚れ物をまとめて海へ向かう。目指すのは崖下の岩場である。源太は土間で兄を待っていて、黙って付いてきた。源太が何を訴えた訳でもないが、この弟が隣近所の遊び仲間に入れないでいる事は与市にも分かっていた。

「あんちゃん、母ちゃんはもうすぐ溶けて無くなるんか」

「何を言い出すんや」

「そうかて、みんな言いよる」

「あほ、そんなことがあつてたまるかいな。あんちゃんがそんなことささん」

汚れ物は膝まで海に浸かって洗った。海に入ってみて、ただ淋しくて海と向き合っていた時には分からなかった海の肌触りが分かるよう

になつた。海は圧倒的な大ききさで、養母の汚れも与市自身の気持ちの毒も、全てを一息に飲み込んで、それから平気で蒼く蒼く光つた。

「見てろ、源。お袋さんの腹ん中の物、全部海に洗つてもろたら、きつと元どおり、元気になる」

源太は黙つて頷き、兄と一緒に海に浸かつて、

「おれ、洗濯が一等好きや」

と勝ち気に言つてのけた。

#### 四、りんご

きみが逝つたのは、それから五か月後、与市十五の年は明けたが、春を探そうにもまだ気配さえ見えぬ：居座つた寒さの最中である。与市に腹を擦つてもらいながら、

「気持ちのええこつちゃ。まるで極楽や」　と涙をこぼし、長く吐き出した息をそれきり二度と吸わなかつた。どうあつても死んではならぬ人も、死んでしまうことがあるのだと、与市は思い知つた。

「お袋さん、不幸の波だけさきに被つて死んでしもた」

人間の幸と不幸の波の数は同じだと、これは、きみが与市に教えた言葉である。恐らくは堪える暮らしを自分自身に言い聞かせる方便だつたのだろうが、与市はそんな言葉でも看病の支えにしてきた。だが、養母の生涯はどう考えても勘定が合わない。勘定の合わない死は、きつと地獄の苦しみだつたに違いない。

「なーにが極楽や」

心は喉仏のすぐ下にあるらしい。何か飲み込む度に、火の付いたように悲しくなつた。源蔵の乗つた漁船は、女房が亡骸となつた朝、引き寄せられるように港に入った。転げながら迎えに出たのは源太である。死んだ女房を前にして、海の男は海に背を向けて一升の酒を飲んだ。心底悲しげに、声を飲み込んで泣いた。そしてちょうど一月後、自分が船出して行く夕刻になつて、新しい母ちゃんだと言つて、臨月の腹を抱えた若い女を家へ放り込んで出ていった。

港々に女がいるのが船乗りの甲斐性だと、おおっぴらに開き直れた

時代である。夕方この妊婦の歩く姿を目で追いかけた村人たちは、おかたこの女も北の港で踊っていたのだろうとか、いやいや南の港で酒を注いでいたらしいとか、さっそく噂に花を咲かせた。実際、噂の半分は当たっているから怖い。ただ不思議なことに、きみといい、この女といい、源蔵の関わりあう女はみな淋しげで派手なところのない、土から掘り出したような女だった。それはまた与市にとって、母しさの面影でもあるから事は厄介だ。

「何て名や」

年端の行かない子供に対するような物言いで与市は女に尋ねた。

「りんご」

「りんご？」

「…源さんがそう付けただもの」

「どこから来た」

「おとついでまで居たのは、大阪」

「大阪の、港か」

「うん」

「親父の船。大阪にも寄るんか」

「うん。大きな船だもん」と、りんごの顔が光った。

「行きも帰りも寄ることがある。でも、あたしは帰り船が好き。このごろは捕ってきた魚を大阪の港に荷揚げすることも多いのよ。大漁旗がね、これでもかってほどたくさんはためいて、ほんと賑やかよ。あつ…あの音」

聞こえてきたのは出船の銅鑼だった。港に小銭稼ぎに出たとき、与市は何回も出て行く船に手を振った。たまに大阪へ行く回船の船出にでも出くわそうものなら、その船にまるで実の父文吾が乗ってでもいるかのように飛び上がった手を振ったものだが…そう言えば源蔵の乗った船を見送ったことはただの一度も無かった。与市はりんごが銅鑼を聞いて腰が浮くのを見ながら、初めてそれに気付いた。「…歳は」

「十八」

「…」

「与市さん…与市さんでしょ。もっと小さな子供かと思ってたけど。」

あんたの歳は？」

どうにも答えようがなくて、与市は首を振った。放り出すように海に逃げてまって、何が新しい母ちゃんやと思った。そのわずか三つ違いの母親は、源蔵の船が出ていく時間をじつと堪えてやり過ぎしてから、改めて壁に張り付くように座って「ごめんね」と下を向いた。

「店を追い出されちまったもんだから、行くところがなくて」

「…」

「ごめんね」

「謝るな」

「え？」

「腹におる子が卑屈になる」

「…」

「あんた、母親になるんやろ。謝るな」

「…」

「ずつとここにおつたらええ。おれが出ていったる」

「あんちゃん！」

何を言い出すのかと、源太が兄を見上げて固まった。

人には退き時がある。今思えば、五歳のとき福村から出たのも、その退き時だったのだ。りんごの子が世に生まれ出れば、源太には血の繋がった弟か妹が出来る。絆が絡み合えば、いつか親子の情も生まれよう。ああ、一仕事済んだと与市は思う。

「怒って言うのとは違うんやで。ただおれは男や。親と思えん若い女と一つ屋根の下には住めん」

与市は出ていく気になつて見渡すと、何一つ持つて出る荷物もないのに気が付いた。ただ腰に手ぬぐいを挟んでから源太の肩を抱き、膝を突いて目を覗き込むと、

「今日から源はあんちゃんや。お前の弟か妹は、も少しでこの世に生まれてくる。おれのした通りに見習つて何でもしたらええ」

とそう言った。ぐずるかと思つたが、一度鼻をかんでやると源太はおさまった。六つで親を亡くした子の、これが強さかもしれない。おれも負けられんと思つて、与市はからつとした笑顔をつくつた。そし

て、手早く急ごしらえの夕餉の仕度をりんごと源太の二人ぶん整え、物のついでにそこまで用足しに出るようなひよこひよこした気軽さで家を出た。

陽はまだ思ったより高く、海は蒼く凪いでいた。ただ、空とは溶け合うことのないきつちりとした水平線が一本、真っ直ぐなのが哀しかった。漁師の親を持ってこの歳まで海に出なかったのが良かったのか悪かったのか、分からぬままに、海よ、

「今日で、さいならや」

言った途端に、不意打ちで目から涙が飛び出した。慌てた与市は自分の腕を噛んで堪えようとした。腕はしょっぱかった。体の芯のほうまで、いつの間にか潮が染みているのだと感じた。すると、ひよいと思い出したのは、源蔵ではなく福村の父文吾だった。

「あんちゃん、菓子屋へ帰るんか」

振り返ると、源太が立っていた。二羽の鶏を二羽とも大きな籠に入れたまま背負って、一人では歩き切れずに、後ろからりんごが籠を支えていた。

「鶏、いつかあんちゃんに返さなあかんで、母ちゃんが言うつつた」

「…お袋さんが？」

「返すも返さんもなかるうにと思つつたが、こういうことやつたんか」

「…？」

「自分が死んだ後、あんちゃんが出て行くこと、母ちゃんには分かつたたんやな」

「…」

「この鶏、兄ちゃんには訳有りの鳥なんやろ。いろんな人の切ない切ない思いのこもった鶏やさかい、どうしても自分のためには殺せんで」

「…」

返す言葉が出なかった。鶏に込めた福村の母の思いを、養母が感じとっていたというのか。それなら、知っていたなら、いくらでも話したい事はあった。会いに行つたのはあの一度だけだと、言い訳もして

おきたかった。お袋さんはりっぱにおれの母親だったと言ってもやりたかった。何も言わずに、何も言わずに、事もあろうに死んでしまつて、それでいいわけがない。それではあまりに酷というものだ。

「あの、あたしたち、送つて行くから……」「いらんわ、見送りなんぞ」「りんごがびくつと震えて一步退いた。鶏が戸惑つたように「こけこつこー」と大仰な声をたてた。源太が噛み付きそんな顔をして兄を睨んだ。

「源」

「ん？」

「…鶏、かしてみ」

「…」

「あんちゃんが背負つたる」

「…」

「そんなもん背負つとつたら…あんちゃんには付いてこられんぞ」

「…よ、よつしゃ」

源太の顔が喜びで弾けた。その顔に負けて籠を受け取つた後に手まで引いてやると、これが世にも奇妙な三人組の珍道中の始まりとなつた。

## 五、朧月

今にも子が飛び出しそうに膨れ切つた腹を抱えては十歩歩くのも辛そうに見えるのに、りんごは案外べたべたと草履を鳴らしてどこまでも二人の後を付いてきた。いい加減歩いたところで、見兼ねた与市が空いた片手をりんごに突き出した。片手で腹を擦り、もう片方の手を与市に委ねて、りんごは頬を真っ赤に染めて笑つた。

「なるほど、りんごじゃ」

と与市が言えば、

「鼻の頭まで真っ赤つかーや」

と源太が飛び跳ねた。

その源太より幼い時に、与市が生みの母と初めて辿つたあの小川沿

いの道には、いままだ蕾の桜の並木が咲きこぼれる春を前にじつと息を潜めている。

「この桜はきれいやぞ。川から花が吹き上げてくると、苦しいくらいの春や」

「ほんと？」

りんごはそう言つて川面から空まで花びらを追うように目を細めた。  
「ああほんとだ」

「見えるんか。まだ咲いてへんぞ」  
と源太がからかうように覗き込むと、途端に泣きそうな顔で、

「あたしつて、安上がりだつて源さんが言うの。夢みたいに心で見たことと、ほんとのことと区別がつかないから」

と、源太相手に真剣に言い訳した。細いほつれ毛が金色に光った。赤い頬にも金色が飛んで、柔らかな初毛の一本一本が光った。与市はいきなり咳き込むほどにりんごが美しかった。だが、腹を突き出して汗をかいて、この女はこのまま永久に自分の美しさには気付くまいと思つた。そういうりんごの一生が、お袋さんが死んだあのうちの中で過ぎて行くのだと思うと、そのことがいらいらするほど悲しくてまた噎せた。

「あんちゃん。どないしたんや。あんちゃんもか？ あんちゃんも心で花を見て苦しくなつたんか」

「ん？ ああ、そうやな」

そうは言つたが、りんごの顔を見ながら、実は桜の花のことなどどうでもよかつた。スタスタと小川沿いの道を離れて商店街に足を踏み入れたが、いざ福村へという気分にもならない。困つたと思つた。思う間に、自分の顔までりんごのように火照り出した。りんごや源太に気付かれまいとして下を向きながら歩いていると、ふいに与市に蘇つたのは桜の風景ではなくて、喉の奥のザラリとした甘さだった。ドキリと胸が鳴つて、嘘のように火照りが引いた。母に買ってもらつたあの飛行船の形をした焼き菓子と舌触りが、与市の心を落ち着かせてくれたものらしい。菓子とは不思議な物だと与市は思つた。

歩く爪先が黄昏てくると、これも不思議なことに菓子の思い出で胸

焼けまでしてきた。考えてみれば、皮肉なものだ。福村の子でありながら、福村の菓子味には覚えがない。食べてはならぬはずの下卑た味だけが生々しい。海に出なかつた漁師の子が、味を知らない菓子屋に戻るのかと思つた。すると不意に足が止まつた。

「あんちゃん？」

「しゃがめ」

「ん？」

「ええから、しゃがめ」

五十歩先に福村があつた。身の隠しようがなくて、りんごの腹が支えそうな路地に奥からりんご、与市、源太の順で、一列に潜り込んで座つた。通りを挟んではす向かいに、福村菓子店が見える。鶏の籠が、取り敢えず三人の姿を隠すには隠したが、もし通行人があつたなら、わざわざ見咎めてくれとでも言うようなおかしなもので、目立つことこの上ない。

「あんちゃん？」

「源。お前、これであの店から……」

胸に下げた巾着を引つ張りだして、一度は中を探ろうとしたが、思い直して首から外し、巾着ごと源太の首に掛けた。

「あの店から、菓子を買つてきてくれんか」「……？」

「何でもええ。これで買えるものを買えるだけおくれと頼んでみ」

源太は何も言わず、頷きもせず、決闘にでも行くような形相で、黙つて福村の店に向かつて駆け出した。

店に立つて、小さな客に應對したのは与市の母である。「母ちゃん」と与市は声にならずに呻いて首を竦め、籠の六角の網目から母を覗き見た。源太と一緒にひいふうみいよと小銭を数え、いざ菓子を包む段になつてその菓子の数が足りなかつたらしく、母が振り向いて声を掛けると、店の奥から父も顔を出した。「あつ、父ちゃん……」と、これは父と別れた時の、五歳の子供の声になつた。父は遠目にも髪の毛の白いのが目立つて記憶の中の父よりもずいぶん小さかつたが、それでも相変わらずの職人面だと与市は思った。父と母と二人が揃えば、源太の正体など直ぐに知れてしまいそうで、与市には源太がまだるっこい



かぎりだった。

「はよ戻れ…何しとんね、源！」

与市をさんざん焦らせたものの、それでも六歳の仕事にしては手際よく買い物を終えて、源太は籠に向かつて突っ込んできた。

手に持った菓子は大きなサイコロのような珍しい形の箱入りで、『福村』と控えめな筆字で掛かれた包装紙に上品にくるまっている。

その包装紙を見て、与市はゴクリと唾をのみ込んだが、同時に「なんだ。あたし知ってる」とすつとんきょうな声をあげたのは、りんごだった。

「それ、朧月って名前のお菓子よ。ふわふわのおせんべいの上に、白い雲がかかっているの。食べると甘くて、すぐ溶けちゃうの」

「嘘つけ！」

与市は目を三角にしてりんごを睨み付けた。鶏がバサバサと羽音を立てた。

「嘘じゃないもの。大阪にいたとき源さんがよく買ってくれたんだもの。おれの息子の父ちゃんが作ったんだって訳の分かんない自慢して…」

「…嘘や」

「…ほんとよ。源さん甘いもの嫌いなくせにこれだけは食べたのよ。でも、三年前までで終り。お菓子が消えちゃったの。お店の代替りで子供が仕切るようになってから、大阪での商売は止めになっいたらしいって言うってた。調べてきたんだわ」

「嘘や、嘘や嘘や。源蔵の親父が…そんな男のわけない」

もしもそんな男なら、お袋さんはなぜあんなに独りぼっちだった。

おれはなぜ、ただの一度も親父さんの膝に抱かれたことがない。嘘に決まってる。与市は菓子の包みを引きちぎった。中から丸い朧月がいくつも飛び散った。りんごの…言った通りの菓子だ。与市は飛び散った『月』を片っ端から拾って口の中に放り込んだ。口の中がいつぱいで噛めなくなつた。そんな状態だから、福村の菓子の味は、やはり与市には分からなかつた。ただ、甘さだけが押し寄せてきて、源蔵の面影に波のように被さつた。親父さんまでいまさら何やと泣けてきた。

いままでおれの生きた路はこんなに甘くはなかったと、菓子にまで腹が立った。ほつぺたを膨らましたままで、もう一度籠の六角の網目から福村の店を覗くと、代替りして子に従ったという父文吾の顔にまで甘い波がかかった。

「あんちゃん？ あの…大丈夫か？」

「源、ここから、鶏、背負って帰れ」

「…」

「おれは、このまま大阪へ行く」

「え？」

「大阪や」

「なぜ？」

と、りんごが後ろから与市の肩につかまった。

「あの店へ、戻るんじゃないの？」

「大阪や」

「なぜ？ なぜ大阪？」

なぜ大阪か、とんと分らない。商売を覚える気も、金を稼ぐ気も、この時の与市にはなかった。ただ、このまま福村へは戻れないという気だけがあつて、

「大阪や」

と繰り返した。父ちゃんの売った菓子を、親父が買って食べたところ。そしてその親父が、お袋を裏切つてりんごと居た町…。

「なんでて、おれがそう決めたからや」

「…ならあだし、大阪まで、送つて行つちやだめ？」

「あほ！」

一括して、与市はりんごを水つぽい目で睨んだ。それから源太と鶏の籠を、りんごの腹に押しつけた。

「源、この人が今日からお前のお袋さんや」 源太は不思議そうな顔をチラリとりんごの腹に向けたが、いたって無頓着に兄に向き直った。

「思い出したことがある。母ちゃんがな、鶏、自分のためには殺せんけど、あんちゃんのためやったら、殺してもかまわんで」

「…」

「金、すつからかんやる？」

苦いものが込み上げてきた。鶏に二人の母がのりうつって、「さあ自分たちを殺してしつかり生きる」とでも言っているように感じた。

## 結

与市の目が、血走った。籠の中から鶏を掴み出して、両脇に抱えた。そしてさつき辿った道を逆に小川まで「うつつ」と声を上げながら走って戻った。川に辿り着くと後ろを窺って、りんごと源太が追いついてこないのを見定めてから、与市は素早く二羽の鶏の喉を片手に一羽ずついっぺんに鷲づかみにした。それから馬乗りになって首を捻り、その上で激しく二三度桜の幹に叩き付けた。与市に慣れた鶏であったから事は造作なかった。

死なせた鶏を金に換えて、与市は一人で汽車に乗った。手を振って送ってもらうのは御免だから、源太とりんごは先に帰した。そしてただ独り、大阪に背を向けて後ろ向きの座席に揺られた。行く手には思ったとおりの大波が銀色の線路を洗っていたが、与市はいつまでも後ろ向きで故郷を見ていた。たった一步を外に向けて踏み出すだけで、故郷はこんなにもきれいに光るのかと、星のように瞬いて海にこぼれそうな灯を見ていた。養母の死に顔も、母の震える手も、二人の父の潮の香も、それにこれからはじまる源太とりんごの暮らしもみんな：みんな星なんや。

「なあ、人間て、きれいなもんなんやな」　そこに居ない誰かにそつと囁いて、与市は何かを噛み締めた。

自分で決めて捨てていく故郷は、何にも代え難い香ばしさで、与市の心にサクリと砕けた。

了